

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第1号 畜産

発行日 平成28年 3月17日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net/agri/>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

◆ 草地 牧草の収量、品質を確保するため、早春の施肥を確実に行いましょう。

1 早春施肥

牧草は平均気温5度から生育を開始します。圃場にトラクタが入れるようになったら、早目に施肥し1番草の収量を十分に確保します。

春の施肥の遅れは減収程度が大きいため、まず速効性のある化学肥料を施肥し、その後堆肥やスラリーを散布することも考えます。

維持管理草地の施肥目安は、下表のとおりです。昨年秋に除染を行った新播草地でも、放射性セシウムの牧草への移行を抑えるため、硫酸など窒素成分だけの施肥ではなく、カリの施肥も行ってください。

表 牧草地の施肥目安(経年草地)

区分	草地種類	施肥時期	10aあたり施肥量(kg)		
			窒素	リン酸	カリ
採草地	オーチャードグラス主体	早春刈取後	10	5	10
		(最終刈後除く)	5	2.5	5
	チモシー主体	早春刈取後	*10	5	10
		(最終刈後除く)	5	2.5	5
放牧地		早春(牧草ほう芽期)	6	3	3
		夏期(7月)	6	3	3
	スプリングフラッシュ抑制	初夏(6月中旬)	6	3	3
		夏期(8月上旬)	6	3	3

「岩手県牧草・飼料作物生産利用指針」より

*チモシー主体草地の窒素の施肥量について、利用初年度は倒伏防止の観点から、5kg/10a程度に抑える

2 早春に施肥をする重要性

イネ科牧草は草種に関係なく1番草の収量が年間収量を決定し、特にチモシーはその傾向が強まります。

早春の施肥により越冬したイネ科牧草の茎が有穂茎(出穂茎、穂ばらみ茎)となる割合が増えます。有穂茎は無穂茎より6~7倍の重量があり、1番草でより多くの有穂茎を確保すれば乾物収量が増えます(イネ科牧草は有穂茎と無穂茎の両方をもっています)。

また、早春の施肥は時期はもとより、牧草にすばやく窒素を吸収させることが大切です。施肥した時期が同じでも速効性に優れた肥料の方がイネ科牧草のもつ有穂茎の数が増え、その結果収量が増加することが報告されています。

草地の安定多収を目指して、まずは早春の施肥に取り組んでみましょう！！



早春施肥は牧草の安定多収に必須！

次号は4月27日(水)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。